

腹部超音波検査でわかる主な所見

◎ 超音波検査の主な目的は以下のふたつです。

1. 形や大きさをみて、炎症や機能不全が無いかを見つけること。
2. 臓器の中に腫瘍(こぶやできもの)、結石(石の様なかたまり)、のう胞(液体の入った袋)、などの病変を見つけること。

◎よく見つかる所見について簡単に解説します。

【胆嚢結石】

胆嚢の中には消化液の一種である胆汁がいつも蓄えられています。胆汁の成分のうちのコレステロールが胆嚢の中で凝縮し、やがて結晶を生じることがあります。石のように固いことから結石といわれています。放っておくと、痛みや炎症の原因にもなります。

【胆のうポリープ】

胆のう内の粘膜の盛り上がり胆のうポリープといいます。

大きく分けて、①腫瘍性と②非腫瘍性があります。

- ① 腫瘍性は、粘膜の細胞が増殖してできます。
良性(腺腫)と悪性(腺がん)がありますが現在、これらができる原因はわかっていません。
- ② 非腫瘍性のほとんどはコレステロールポリープで、これは胆汁中のコレステロールエステルが粘膜に沈着してできます。

【胆嚢腺筋腫症】

胆嚢の良性腫瘍の一つで、胆嚢の壁が厚くなるものです。原因ははっきりしておらず、症状も特にありません。胆嚢結石を併発することが多く、胆嚢結石からの上腹部痛をきたすことがあります。

【脂肪肝】

肝細胞に脂肪が蓄積した状態です。

肥満・糖尿病・アルコールによるものが原因のほとんどです。

脂肪肝に特有の症状はなく、無症状のことも少なくありませんが、動脈硬化・脂質異常症・虚血性心疾患・脳卒中になるリスクが高くなり、肝硬変や肝臓がんに進展することもあります。

【肝血管腫】

肝臓にみられる良性の腫瘍で、毛細血管がうずを巻いてスポンジ状のかたまりをつくったものです。肝臓に発生するがんと紛らわしいものもありますので、はじめて指摘されたものは精密検査で正しい診断をつけておく必要があります。血管腫と判明すれば、経過をみる程度で十分です。

【腎結石】

腎臓は血液をろ過して老廃物を尿として体外に送り出す働きをしています。尿の成分の一部が結晶をつくり固まったものが石の様に硬くなって尿管や尿道に詰まると痛みや出血を起こします。

【のう胞(肝臓、腎臓、膵臓、脾臓にできやすい)】

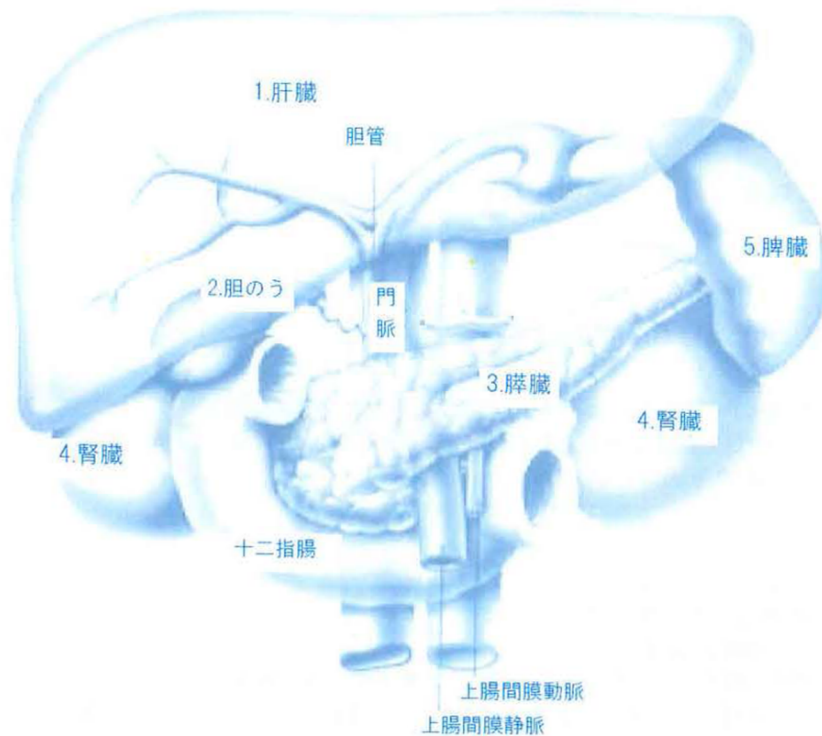
中に液体を蓄えた袋状のものをのう胞と言います。症状は出にくいのですが、稀にのう胞が急速に大きくなり、機能障害などにつながる場合もあります。

【石灰化像(肝臓、腎臓、脾臓にできやすい)】

炎症がもとで菌の死骸や壊れた血球が塊となったもので、自覚症状の無いものがほとんどです。

特に心配しなくてよい所見とされています。

主な臓器の働き



- 1.肝 臓 : 肝臓の働きは、
 - ①食べた物をエネルギーに変える
 - ②アミノ酸や脂肪の代謝
 - ③体内に入った有毒物の解毒
 - ④胆汁を分泌して、食べた物の消化を助ける。その他多くの作用をしています。
- 2.胆のう : 胆のうは、肝臓で作られた胆汁を蓄えます。
必要に応じて収縮し、胆汁を十二指腸へ送り出し食物の消化を助けます。
- 3.膵 臓 : 膵臓は、消化酵素を含んだ膵液を十二指腸へ分泌する作用と、血糖値を調節するホルモンを血液中へ分泌する作用があります。このように膵臓は食べたものを消化する働きと、血糖値を正常に保つ働きをしています。
- 4.腎 臓 : 腎臓の働きは、
 - ①尿として老廃物を出す
 - ②電解質のイオンバランスを保つそれにより、細胞内外の水分を一定に保ったり、神経の伝達、筋肉の収縮、止血等に作用しています。
 - ③血圧の調整
 - ④造血ホルモンを分泌する(赤血球を作るよう骨髄に働きかけます)。
 - ⑤骨の生成に必要なビタミンDをつくる。
- 5.脾 臓 : 脾臓の働きは、血液中の異物や老化した赤血球・病的変化した赤血球の処理をしています。
病的赤血球が増えて脾臓で処理する量がふえると、脾臓が大きくなります。